ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
2022年３月31日 発行

# 阡陵

No. 84

[ SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT ]

蓄音機 ビクター IV 型 Type M
（アメリカ・ビクター社　1909 年製）

◉ 目　次 ◉

高松塚古墳壁画の検出とその報道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・米田　文孝　2
勝義邦撰「神戸海軍操練所碑文稿」と武岡豊太 ・・・・・・・・・・・・高久　智広　4
大津市の藁蛇を作る正月儀礼 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森本　安紀　6
式亭三馬『小野篁謫字尽』―パロディとことば遊び― ・・・・・・・・・岩下　真央　8
近畿地方石器時代石材産出地をめぐって ・・・・・・・・・・・・・・・山口　卓也　10
100 年歌い継がれた関西大学学歌のゆらぎについて ・・・・・・・・・・篠塚　義弘　14

関西大学博物館
〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel. 06-6368-1171（直通）　Fax. 06-6388-9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/

# 高松塚古墳壁画の検出とその報道

米　田　文　孝

1934年（昭和９）、大阪府高槻市にある京都帝国大学地震観測所で地震計の増設工事中、夾紵棺を埋納した阿武山古墳の墓室が発見された。その報に接して現地に急行された末永雅雄先生は墓室に上半身だけ潜り込まされ、「懐中電灯で見ると石室は小さく天井は低く、周囲には白壁をつけてある。一瞬私は愕然とした。これは朝鮮や満州の壁画古墳を連想したからである。しかし期待した壁画はなく（下略）」という記録を残された〔『日本の古墳』1961〕。

それから38年目の1972年（昭和47）、末永先生が所長（以下、肩書は当時）を務められていた奈良県立橿原考古学研究所(以下、橿考研)の手により、高松塚古墳の壁画が世に開かれた。後述するように、その成果が３月27日の全国紙朝刊の紙面に掲載されると、下降気味であった飛鳥ブームが再燃し、平日でも千里を遠しとせぬ人びとが全国各地から、高松塚古墳を一目見るために押しかけた。

その後、高松塚古墳は報告書や研究書のみならず、従来では想定外の媒体にもその成果が報道されるようになった。ここでは、高松塚古墳の壁画検出の公表直後から約半年間における新聞報道や雑誌、一般書などの活字媒体から、その社会的な拡散について勘案してみたい。

さて、1972年３月２日から開始された発掘調査の経緯は、当時２年次生で参加されていた森岡秀人氏による詳細な調査記録(通称森岡日誌)と、これをもとに執筆された『高松塚古墳』〔森岡秀人・網干善教1995〕に譲るが、壁画は３月21日（火）の12時30分ごろに確認された。25日（土）の午後には地域住民の方々を限定対象とした現地説明会が開催され、26日(日)の13時、阪合小学校で公式に記者発表が行われた。

翌27日の全国紙をはじめ各紙の朝刊一面には、高松塚古墳に関する記事が大きく掲載された。例えば、朝日新聞（大阪版）では１頁に「飛鳥に装飾古墳」、「法隆寺級の壁画」などの見出しと共に、西壁女子群像（通称飛鳥美人）と石槨全景の写真が掲載された。あわせて、末永先生や田中琢氏（文化庁文化財調査官）、原田淑人氏（日本考古学会長）の談話が載せられた。

また、３頁には「法隆寺の壁画に匹敵するといわれる高松塚古墳の見事な壁画は、奈良県・飛鳥地方南西部の小さなハダカ山の下に眠っていた」にはじまる発掘の顛末が関係者のコメントを添えて紹介された。朝刊の記事を追うように、夕刊３頁には海獣葡萄鏡の写真と女子群像や月像・白虎、玄武、星宿図の模写が掲載された。見出しや写真などは多少異なるが、東京・西部・名古屋版でも同様に報道された。

３月29日（水）の朝刊（大阪・名古屋版）、30日の朝刊（西部版）には別刷（カラー特集）として、１頁大の西壁女子群像の原色印刷紙が挿まれた。裏面には東壁男子群像や青龍、玄武の白黒写真が刷られたが、日刊紙におけるカラー印刷紙面のはじまりであるとされる。他紙でも遅れて原色印刷が制作されたが、この経緯については別の資料に詳しい〔大八木成男1988『史窓余話』９、便利堂編2020『高松塚古墳壁画撮影物語』〕。『関大』第198号（４月15日号）では「高松塚古墳の壁画」と題した網干先生による調査概要と、発掘に従事した学生である石田修・中上京子両氏の参加記が紹介された。

さらに調査成果は国内のみならず、国外でも報じられた。例えば、網干先生の訪韓にあわせた『京郷新聞』（「古代日本文化 源流は韓国」７月19日）や『朝鮮日報』（「日飛鳥古墳 韓国影響明らか」７月20日）、『韓国日報』（「日飛鳥壁画 源流は韓国 高句麗より新羅・百済の影響を受けた」７月20日）などがある。

このように新聞報道は日増しに過熱していったが、発見直後の壁画を直近で観察したのは、最初に盗掘孔から上半身を入れた女子学生を除き、発掘現場を指揮されていた網干先生と伊達宗泰氏（橿考研所員）の研究者２人のみであった。情報の混乱を憂慮された末永先生は、担当者が正確な報告を行うのがよいという判断から、概要報告を伊達氏に指示されたという。

これを受けて、伊達氏は『朝日ジャーナル』４月14日号に「飛鳥・壁画古墳の発見」を執筆されたが、これが高松塚古墳発掘に関する文献資料の嚆矢となった。この報文では石槨の計測データはもとより、出土した海獣葡萄鏡の鈕に紐も残存していたという記述をはじめ、担当者ならではの内容であり興味が尽きない。伊達氏は、「ガラス器など異国調の金銀装身具を出土した新沢126号墳など（中略）一生に再度こない幸運とばかり感動した感激を経験しているが、今回はより以上その感動は強烈、衝撃的であった」と記されている。この時点で視点が朝鮮半島・中国からシルクロード・ユーラシア大陸に拡大していることも重要であろう。

同じく『週刊朝日』４月14日号では、表紙の女子群像写真に「カラー特報 よみがえった飛鳥の古墳壁画」の見出しが躍った。その巻頭には西壁女子群像の拡大写真や石槨の見開き写真、東壁女子群像の原色写真が掲載され、白黒写真で男子群像や青龍、玄武、調査風景などが続く。本文では「壁画古墳をめぐる５つの謎」と「天皇陵は掘れないのか」とする記事が展開されている。翌15日発行の『週刊新潮』でも、巻頭原色写真と特集記事が掲載された。『週刊朝日』は５月５日号においても、松本清張氏による「美人壁画ミステリーを解明する」で追っている。

学術誌では、『日本のなかの朝鮮文化』第14号（６月25日）が高松塚古墳の特集を組んだ。巻頭の有光教一氏による「高句麗時代の壁画墳」に関する論究をはじめ、「装飾古墳と古代の日朝関係」や「高麗尺と条里制」などが論じられる。座談会「高松塚古墳をめぐって」では、上田正昭・金達寿・司馬遼太郎ら５氏が、殯と仏教や壁画の個性、粉本の問題などについて、議論を交わされている。次いで『日本歴史』第293号（10月１日）が、義江彰夫氏による論文「高松塚古墳の壁画風俗と被葬者」と、井上光貞・岸俊男・斎藤忠氏ら６氏による座談会「高松塚古墳をめぐって」の記録を掲載する。

**写真１　『週刊朝日』４月14日号**

紙幅も尽きたので、媒体の種類別に時系列に沿って列挙しておこう。まず、写真誌ではB4判を生かした『アサヒグラフ』４月14号が「よみがえった1300年前の群像」として迫力に満ちた原色図版を特集している。「飛鳥の美人と貴人たち」としてB4判で臨時増刊号を刊行した『週刊読売』５月５日号も同様である。

**写真４　『週刊読売』５月５日臨時増刊号**

月刊誌では、６月１日に『歴史と人物』６月号で「高松塚古墳の源流を探る」や『婦人之友』第６号で座談会「明日香に語る－高松塚古墳をめぐって－」、『科学朝日』第６号で「東南アジア全域の研究課題－高松塚古墳を発掘調査して－」、『文芸春秋』６月特別号で「天皇の墓を掘って何になる」が刊行された。次いで『歴史読本』８月特別号（７月10日）で「高松塚古墳と渡来文化」や『産業と文化』第１号（８月31日）で対談「大らかな古代人の風俗」の特集や記事が組まれた。また、『太陽』10月号（９月12日）では「聖徳太子の謎」と関連して、西壁女子群像の原色図版が掲載されている。

美術誌では５月１日に『芸術新潮』５月号で「飛鳥壁画の画家」、６月１日に『芸術生活』６月号で「高松塚と装飾古墳」、『日本美術工芸』第405号で「高松塚古墳の謎」、６月30日に『古美術』37で「高松塚古墳壁画」、８月１日に『仏教芸術』87号で「高松塚古墳特集」、８月１日に『三彩』291号で「随筆 高松塚古墳が発掘されて」の特集や記事がある。

また、単行本では『壁画古墳の謎』（６月24日）や『朝日シンポジウム高松塚古墳』（６月25日）、『飛鳥高松塚古墳』（７月10日）、『シンポジウム高松塚壁画古墳』（７月10日）、『飛鳥の謎』（８月10日）、『高松塚古墳と飛鳥』（９月15日）と、矢継ぎ早に刊行された。

このように、歴史・美術系月刊誌や単行本のみならず、従来にはなかった婦人誌や総合誌にまで特集されるという、ある種の社会的現象が生じた。

10月25日、壁画検出から約半年という短期間で『壁画古墳高松塚 調査中間報告』（橿考研・明日香村）が刊行される。これ以降は石槨の解体修理にともなう発掘調査成果報告が刊行された2017年まで、本書が実測図や数値データなどの基本となった。その後、研究成果の公表はもとより、壁画検出から10年、20年と、節目の年次には講演会や展示会などが開かれてきたが、2022年の今年その50周年を迎えた。

関西大学文学部教授

# 勝義邦撰「神戸海軍操練所碑文稿」と武岡豊太

高　久　智　広

本誌執筆の依頼を受け、バックナンバーのページを繙くなかで、思いがけず見覚えのある名前に出会った。武岡豊太である（西本昌弘「木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檫」拓本と命がけの手拓作業」『阡陵』№82、2021年３月）。

同誌において西本氏が記されているように、武岡は淡路出身の事業家で、度重なる洪水を引き起こし、神戸市街拡大の阻害要因となっていた湊川の付け替え工事を担当し、新開地の開発にも尽力した人物として知られる。また、歴史・文化にも造詣が深く、浮世絵蒐集や勤皇志士の顕彰にも注力し、これらに関する文筆も数多く残している。

私の武岡との出会いは、前職の神戸市立博物館において、2004年に武岡旧蔵の「神戸海軍操練所碑文稿」（以下、碑文稿）の受贈手続きを担当したことに始まる。神戸海軍操練所（以下、操練所）といえば、神戸の幕末維新史を語るうえでは欠かせない存在であり、神戸開港150年記念特別展「開国への潮流―開港前夜の兵庫と神戸―」（2017）をはじめ、同館で開催したいくつかの展覧会で紹介してきた。しかし、これまではその伝来経緯については検討を加えてこなかったことから、本稿では武岡との関係を手掛かりに、その経緯に注目してみたい。

この碑文稿は、本紙152.1×72.5（cm）の掛幅装となっており（図１）、収納箱には武岡による３つの墨書がみえる。表書の「軍艦奉行海舟勝麟太郎神戸海軍営碑文原稿」、側面の「勝安房守海軍営碑原稿／生島氏贈」、そして蓋裏の以下の文章である（図２）。

是者勝房州の滞留せし神戸の名門生島四郎太夫の家にありしもの、当時これを書せしに年號干支を一年思ひ違ひ、文久三年を二年とせしことを気付き、更ニ改め書したふもの、今諏訪山公園ニある碑となれり、生島氏別野者奥平野祥福寺の西ニあり、房州茲ニ起臥す、薩の一書生来り、謁して門下の人なるもの、我海軍最初の元帥伊東祐享伯なり、神戸港の観艦式統監として伯者此家ニ府を置き、感慨無量の懐旧談あり、予等伯か有終の襟度ニ承服せしこと記憶を逸せす、元治元年此家ニ於て房州者海軍を詠する長歌を明治六年再海軍古詩長篇を筆す、一隻の屏風となり、予か薦する處、併せ見て我海軍発達史乃資料となすへきなり

大正乙丑春日、於須磨茅屋、

楽山武岡豊識［豊］［楽］

武岡旧蔵「薬師寺東塔檫」拓本の箱蓋裏書（西本2021）と同様に、びっしりと碑文稿の成り立ちと意義を認める。ここに登場する生島四郎太夫は神戸村の庄屋をつとめた人物で、幕末期に神戸に滞在した勝海舟と懇意になり、彼に奥平野村（現神戸市兵庫区）祥福寺の西にあった自らの別邸を提供した。この碑文稿はその生島家に伝来したもので、年号・干支を文久「二」年歳次「壬戌」と誤記したのは、海舟の「思ひ違ひ」によるものであり、それを書き改めたものが諏訪山公園にある碑になったという。

神戸海軍操練所の開所は元治元年（1864）５月であり、これに伴って勝は軍艦奉行並から軍艦奉行に昇格し、操練所のトップとなった。石碑の文面を勝が認めたのは同年10月８日である。しかし、一か月後の11月、勝は禁門の変の関係者との繋がりを疑われて罷免され、翌年３月には操練所も閉鎖。石碑は幕府の追及を恐れた関係者により土中に埋められる。勝

**図１　神戸海軍操練所碑文稿**
**勝義邦撰　神戸市立博物館蔵**

**図２　「神戸海軍操練所碑文稿」箱蓋裏書**

**図３　諏訪山公園に移設された神戸海軍操練所の碑**

の思いを刻んだ石碑が操練所内にその姿を誇ったのは僅か数か月であった。石碑はその後、生島氏によって掘り起こされ、勝がかつて起居した奥平野別邸の庭に移される。そして、大正４年(1915)11月、生島別邸から神戸港を一望できる高台の諏訪山公園の現在地（現神戸市中央区）に、経緯を刻んだ副碑とともに改めて移設されたのであった（図３）。

こうした経緯を記すのは、神戸史談会が発行する『兵庫史談』第24号（昭和２年〈1927〉）所収の「海軍々營之碑」である。神戸史談会は、明治38年(1905) 創立の郷土史研究団体で、大正15年に会報『兵庫史談』を創刊しており、この時の神戸史談会会長が武岡豊太であった。

碑文稿には他に「大正十四年四月三日　維新史料編纂局展観」と記された紙片も同梱されている。維新史料編纂局とは文部省維新史料編纂事務局（以下、事務局）のことであろう。事務局は、明治44年に文部省の下に設置された維新史料編纂会の事務を掌理する組織であり、大正期には「史料採訪」に特に注力した。そのために、編纂官らは全国各地に出張したが、なかでも「畿内諸府県が突出して多」かったという。彼らは各地で「関係者と面会し、史料閲覧や故老からの聞き取りを実施」した。（浅井良亮「明治を編む―維新史料編纂事務局による維新史料の蒐集と編纂―」『北の丸―国立公文書館報―』第50号、2018年３月）。

武岡は、昭和５年（1930）神戸で開催された観艦式記念開港博覧会にも碑文稿を出品するなど、自らの持つ情報の提供や史料の公開に積極的であった。おそらく、維新史料の編纂事業にも率先して協力しただろう。

また、箱書の「生島氏贈」「大正乙丑（大正14年）春日」という記載と、同年４月３日の事務局による展観も無関係ではあるまい。武岡は『兵庫史談』第１号（大正15年１月）の序文に、同会は「相当の努力を尽して郷土の研究と兵庫県下の史蹟」の研究をなしており、「永年調査研究してゐる資料を高閣に束ねておく」のではなく、「牛歩的でも」公開していくことが必要だと説く。武岡は神戸史談会の会長であるだけでなく、「大楠公碑の由来」「湊川神社創立の沿革」（いずれも同第19号、1927年７月）、「先山の金石文」（同第28号、1928年４月）などの文章を精力的に同誌に寄せている。彼は、郷土史の掘り起こしにも強い関心をもって取り組んでいたのである。先述の「海軍々營之碑」の文責は明らかでないが、すでに碑文稿を手にしていた武岡が、この記事の作成に関与した可能性も低くない。こうした武岡の姿勢に、生島氏は碑文稿を彼に託すことを決めたのだろう。

碑文稿はその後所有した市民の御好意で神戸市立博物館に寄贈され、現在、同館のホームページ（https://www.kobecitymuseum.jp）で関係資料とともに公開されている。武岡が取り組んできた碑文稿の歴史的意義解明のバトンは、今度は現在を生きる我々に手渡されたといえるのかもしれない。

---

関西大学文学部准教授

# 大津市の藁蛇を作る正月儀礼

森　本　安　紀

日本各地の儀礼には、よく藁綱が見られる。藁綱は勧請縄として神社の境内や村境に掛けたり、綱引きをするなど、さまざまな用途で見られる。

本稿では、大津市内で行われる正月儀礼で藁蛇が見られる３つの事例について報告したい。いずれも三井寺（園城寺）の鎮守社がある氏子の地区で行われており、大津市ではこれらの地区にのみ藁蛇が登場するということが興味深い。

その３社のうちの１社である三尾神社の氏子区域のなかで、最も琵琶湖に近い中保町では、１月第一日曜日（かつては１月６日）に、三尾明神の象徴であるという蛇を藁でつくり、道端に掛ける「蛇打ち神事」が行われる。この藁蛇は約30束の藁を用い、頭の直径は35㎝、全長は18ｍにおよぶもので、目にはミカンをつけ、胴の中央に榊の御幣をたてる。この蛇は尾が３本あるのが特徴で、それぞれの尾の先から15㎝ほど中央に寄ったところに御幣をたてる。現在は京阪電車石坂線の浜大津駅と三井寺駅の間にある公民館の前の木枠に、長い胴の部分は巻き付けて掛けている（写真１）。昭和13（1938）年頃までは、京都へ流れる琵琶湖疎水の入り口に架かる観音橋の東側に、道路をまたぐように建てられた木枠に掛けられていた。

この儀礼は、奈良時代の養老年間に近江国高島郡三尾が崎の観音像が大津の浜に流れ着いた時に、この像の上に乗っていた３匹の小蛇が陸に這い出て、三尾明神のいる山を仰いだということから始まったという伝承がある。10日間掛けられていた藁蛇は１月15日に三尾神社境内へ移され、氏子が持ち寄った注連縄や古札と一緒に燃やされる。かつてはこの火を薪やろうそくに移して家に持ち帰り、その火によって小豆粥を炊いて邪気を払うといわれていた。

この中保町の東隣に位置する尾花川は早尾神社の氏子区域の中で最も琵琶湖に近い地区である。ここでは１月14日の夜「蛇の顔見せ」とよばれる、藁蛇を担いで各家をまわる儀礼が行われる。この日の昼間に公民館で２体の蛇を、それぞれ約40束の藁を使って作る（写真２）。藁蛇の頭は50㎝、長さは約５ｍで、首に細い縄を20回巻くのが雄で、22回巻くのが雌とされている。かつては、子どもたちが持ち寄った藁で、長さを競い合うようしていたという。18時すぎに子どもたち（かつては男児のみ）が集まり、藁蛇を載せた梯子を担いで、雄は地区の北側、雌は南側へと別れて「蛇の顔見せです」といいながら地区の200戸ほどの家を廻る。顔見せを招いた家の家族が頭を差し出し、蛇はかぶりつく仕草をする。そして、子どもにお小遣いと古札を渡す（写真３）。この時集めた古札は翌日の朝、早尾神社の隣の畑で藁蛇と一緒に燃やす。

三尾神社の隣の長等神社では、１月14日に「綱打祭」として、約30束の藁を使って、大蛇を模した蛇頭と長い尾を作る。蛇頭は大きな口を開

写真１　蛇打ち神事（2012年撮影）

写真２　蛇の顔見せ（2017年撮影）

写真３　蛇の顔見せ（2017年撮影）

写真４　綱打祭（2012年撮影）

写真５　綱打祭（2012年撮影）

けた造作になっており、目は橙（だいだい）を付けている（写真４）。蛇頭は拝殿に飾り、長く編まれた胴体部分は神社の楼門の外までのばされる。１月15日はどんと焼きのため、早朝から氏子たちは尾から胴体へと踏みながら参詣する（写真５）。この胴体部はきちんと編まずに左右が斜めに交差するように緩く編んで道に置いてあるため、どんどん踏み荒されていく。かつては各氏子町が競いあって藁を持ち寄ったので、胴体部分は長等神社から直線距離で700m ほど離れた氏子区域の境界である京阪電車の線路道にまで長く伸ばされていたという。この藁蛇の尾を踏むことで参拝者の厄が藁蛇に移されて、１月16日に氏子が持ち寄った注連縄や古札などと一緒に燃やして、厄が払われる。

この３ヶ所で行われる藁蛇の儀礼は、いずれも最後に燃やすことで氏子の厄を払うが、その方法はそれぞれ異なる。①三尾神社の中保町では一定期間掛けられて、これを燃やした火を煮炊きに使う。②早尾神社の尾花川地区では家々を周り、厄を集める。③長等神社では藁を踏み歩いて厄を移す。

藁を踏み歩くという行為は別の視点でも検討できる。三重県伊賀市平田の植木神社では、かつて年末に歳神の通り道として道路の中央に砂で一筋の道を作ることが行われていたという。年が明けるまで歳神の通り道だからと、崩すことはしない。年が明けると砂を崩しながら参詣する。黒田（2013）は、奈良県大和郡山市にも神社から砂道を引く事例があり、かつては氏子の家の玄関まで砂道を繋いでいて、各家から氏神社までの参詣路を示すとともに、神が各家に訪れることを示していると報告している。

注連縄などの正月飾りは歳神を迎えるためのものであり、どんと焼きで燃やされる。長等神社の藁蛇が、かつては氏子区域の境界までの長さだったことは、正月を終えるに当たって参詣する各家から神社までの道を示していることになる。綱打祭の翌日に藁蛇を、尾から踏みながら正月飾りを持って参詣するということに意味がある。

『日次紀事』（延宝４・1676年序）の「正月十三日」の記述に「綱引　江州大津の人と三井寺門前の人與各々原野に於て左右に別列し互に大綱を引て争ひ両方共に太鼓を撃ち互いに競ひ進む　引勝方其の年各々福を得ると謂ふ　是を綱引きと称す十四日の朝に至て止む」とある。

三井寺門前の人とは現在の南門と北門の前の地域や長等神社の前の地域にあたる、もともと三井寺領だった地域の住民と思われる。この住民と町側の住民が、13日から翌日の朝まで綱引きをしていたとあるので、正月を終えるにあたり、夜通し行っていたことになる。大阪市の難波八坂神社では１月14日（現在は１月の第３日曜日）に八岐大蛇の形をした綱で綱引神事が行われる。氏子区域の人たちは左右に分かれて勝負をして、勝った方が福を得るという。綱引きのあとに、綱を担いで神社の周囲を廻る。小正月に藁蛇を担いで廻るということは、尾花川の蛇の顔見せに類似している。

三井寺の鎮守社のある地域で藁蛇の儀礼が行われているのは、小正月に行われていた綱引きが、それぞれの地区で形を変えて、現在も伝承されている姿と言える。

参考：黒田一充（2013）．歳神を迎える．阡陵，66.

滋賀県立大学人間看護学部　准教授

# 式亭三馬『小野篁讃字尽』―パロディとことば遊び―

岩　下　真　央

図１『小野篁讃字尽』より「内題・総目」1806年刊
（東京学芸大学附属図書館蔵）

江戸時代後期の戯作者・式亭三馬による滑稽本の一つに『小野篁讃字尽（おのがばかむらうそじづくし）』（文化３年（1806）刊）がある。本の表題及び主題は、江戸時代に広く使われた往来物『小野篁歌字尽（おののたかむらうたじづくし）』のもじりであり、全36項目のうち24項目が節用集のパロディである（鈴木, 1974、太平, 1993）。辞書の体裁を維持しながら、江戸庶民の日常生活に関する事物をユーモラスに表現している点が特徴的である。曲亭馬琴、恋川春町の黄表紙を基にして書かれた箇所や、葛飾北斎の錦絵から着想を得たと考えられる項目等もあり、江戸のパロディ文化を示す作品である。

『讃字尽』には、様々なことばと文字を用いた遊びが収録されている。その中から、黄表紙をモチーフにして書かれた項目を以下に紹介する。

８丁裏から９丁表の項目「大篆小篆似字尽（だいてんしょうてんにたじづくし）」（図２）には、篆書体の漢字を物に見立てて読解させる文字遊び「似字」がある。この項目は、曲亭馬琴の黄表紙『無筆節用似字尽（むひつせつようにたじづくし）』（寛政９年（1797）刊）（図３）から着想を得て作られたと考えられる。馬琴の『似字尽』には、漢字や平仮名、片仮名を物に見立てた似字が合計70字書かれている。一方の『讃字尽』では、篆書体の漢字に限定して似字とし、『似字尽』から６字の字形や訓を採用し収録している。

14丁表から21丁表の項目「小野篁讃字尽」は、江戸時代に寺子屋で使われていた漢字学習のための往来物（教科書）『小野篁歌字尽』を原本としたパロディである。「讃字」は漢字を組み

図２『小野篁讃字尽』より「大篆小篆似字尽」
（東京学芸大学附属図書館蔵）

図３『無筆節用似字尽３巻』1797年刊
（国立国会図書館蔵）

図４『廓篁費字尽』1783年刊（国立国会図書館蔵）

図５『小野篁讃字尽』より「小野篁讃字尽」
（東京学芸大学附属図書館蔵）

合わせて新たな漢字を創作したり、単字や熟字に連想的な訓を付けたりする遊びであり、「譳字尽」中に全57項189字が収録されている。表題の「篤」という字も譳字の一つであり、「篁」の字の「皇」を「愚」に変えて「ばかむら」と歪曲して読ませる。この「篤」の字の初出は『譳字尽』ではなく、恋川春町の黄表紙『廓篤費字尽』（天明３年（1783）刊）だと考えられる。『費字尽』には譳字と同様の漢字遊び「費字」全17項65字が掲出されており、そのうち27字の字形や訓が『譳字尽』に引用されている。

『費字尽』７丁裏の第７項（図４）には、「男」と「女」という２字の漢字を組み合わせた創作漢字が掲載されており、「へだたるがみたてふられるうしろむき。よこがきまりにおくるきぬぎぬ」という歌が添えられている。『譳字尽』16丁表の第15項（図５）は『費字尽』を一部改変して引用し、「むかひあふみたてふられたうしろむきよこがきまりでおくるきぬぎぬ」としている。『譳字尽』では、『費字尽』の３字目「きまり」に該当する創作漢字を掲載せず空白としているが、歌については「よこがきまり」という第４句をそのまま残した形で引用している。

このような改変が行われた背景に、寛政の改革があると考えられる。寛政２年（1790）の出版統制令では風俗を乱すものとして好色本の類の出版が禁じられ、『費字尽』の作者である春町も弾圧を受けた。厳しい統制の中で法令に違反せずに「売れるもの」にするためには、幅広い読者の需要に応じる必要があった。三馬は『坂東太郎強盗譚』（文政８年（1825）刊）の初編序の中で、『譳字尽』と同時期に出版した自著の黄表紙『雷太郎強悪物語』（文化３年（1806）刊）について、「お子さまがた」が好む作品を予想して投じ、大当たりしたと述べている（本田, 1975）。『譳字尽』についても、規制に抵触しない程度に『費字尽』の色を残しつつ、年少者を含めた幅広い読者層に支持されることを想定して執筆したのではないだろうか。

黄表紙の他に、版画作品から取り込んだと思われる文字遊びもある。23丁表から24丁裏の頭書「おいらんだ文字」（図６）は「オランダ文字」のもじりであり、吉原の遊女が使った「ゴセウザンス」、「オガミンス」といった廓詞を、横倒しにした一筆書きの平仮名で記して西洋風の筆記体に見立てる遊びである。この「おいらんだ文字」と同様の文字が、葛飾北斎の錦絵「おしをくりはとうつうせんのづ」（図７）の画題と款記に見られる。文化元年（1804）から文化２年（1805）頃に制作された作品であり、同時期の北斎の作品に銅版画風の木版画集「江戸八景阿蘭陀画鏡」があることからも、当時の北斎は西洋画の技法を学んでいたと考えられる。遊び心のある画題と款記は、西洋画を真似て書いたものであろう。

『譳字尽』がパロディの対象やモチーフにしたものは、上記に挙げた以外にも、物語や随筆、説話、芸能等の多岐に渡る。様々な事物を滑稽化して親しみやすい遊びに仕立て、大衆向けのパロディとして完成された『譳字尽』は、「道外節用」という内題の通り、まさに江戸の人々にとっての「ことば・文字遊びの辞書」だと言える。近世の言語と文化を考える上で、重要な資料の一つである。

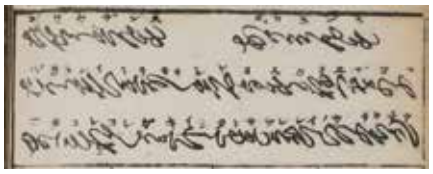

**図６『小野篤譳字尽』より「おいらんだ文字」（東京学芸大学附属図書館蔵）をもとに作成**

**図７「おしをくりはとうつうせんのづ」1804-1805年頃作（Colbase<https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-10569-638?locale=ja>）**

**【参考資料】**


鈴木真喜男「小野篤譳字尽」『日本庶民文化史料集成』９巻，藝能史研究會編，三一書房，1974, pp. 411-436.

太平主人『小野篤譳字尽』太平文庫，1993.

棚橋正博『式亭三馬　江戸の戯作者』ペリカン社，1994.

本田康雄「式亭三馬の合巻と読本」『国文学研究資料館紀要』１号，1975, pp. 183-201.

吉丸雄哉『式亭三馬とその周辺』新典社，2011.



関西大学博物館学芸アシスタント

関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学

# 近畿地方石器時代石材産出地をめぐって
# ―奈良県橿原市畝傍山の流紋岩―

山　口　卓　也

## 1　はじめに

奈良県橿原市畝傍山の流紋岩原石産地の踏査を、2021年の秋、山下大輔氏、渡邊貴亮氏、斎藤安輝氏とともにおこなった。そこで、畝傍流紋岩製の打製石器を採集し、さらに打製石器生産が可能と思われる硬質緻密な流紋岩の産出を確認することができた。近畿地方中央部の石器時代石器石材は、従来から二上山産出サヌカイトが支配石材であると考えられてきたが、この発見によって、二上山北麓以外の第三紀中新世火山岩原石産地の石材も、局地的短期的ではあろうが開発された可能性があるとの知見を得たので報告し、若干の問題を検討したい。

## 2　奈良県橿原市畝傍山の流紋岩

大和三山の一つ畝傍山は、均整が取れた鐘状地形の容姿で知られる標高199mの小山である。近畿地方中央の瀬戸内火山岩区第三紀中新世火山岩産出地として、基盤の花崗岩に流紋岩（末永1961では黒雲母斜長流紋岩、春木1932では黒雲母安山岩）が貫入している。流紋岩の露頭する中腹以上は傾斜25-35度、花崗岩からなる以下は傾斜約10度となっていて、山頂部は丸みをおびる（図１）。

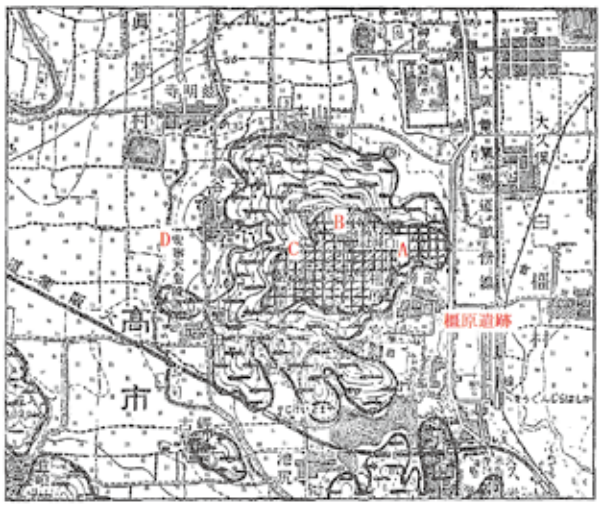


図１　奈良県橿原市畝傍山（春木1932を改変）

筆者らは、春木篤夫（春木1932）の記述を参考に踏査した（写真１）。実見した東尾根から山頂部の範囲では、樹木に覆われて新鮮な露頭の観察が困難であったが、登山道に沿った裾部の滑落や山頂部で岩石観察と石器類の採集をおこなった。畝傍山に散乱する流紋岩片の多くは風化が進行して、節理から破砕して短冊板状になり、純白または淡灰色化して、一見頁岩や泥岩などの堆積岩に見えるものが多いことを確認した。白化したものは、手にとると脱珪酸によって軽量化している感触がある。一部は風化によってはっきりとした流状構造を顕在化させている。東尾根の鞍部には、節理の発達した新鮮な青灰色流紋岩が露頭している（図１Ａ、写真２）が、薄剥状に割れてヒンジを作る癖があって、塊状には取り出しにくい。

山頂部北側斜面の山道（図１Ｂ）で、山頂からの崩壊石片の堆積から打製石器１点を採取、他に山頂部周辺から人為的と思われる風化して剥離面観察の困難な剥片数点を採取した。

打製石器は、大形の硬質流紋岩剥片の周囲から両面加工を行って尖頭部を作り出すもので、片面には自然面を大きく残す。大きなヒンジと

写真１　畝傍山の石材採集

写真２　東尾根鞍部流紋岩露頭（A）

写真３・４　山頂北側斜面の打製石器と流紋岩片（B）

打面があって厚みを削ぐことができず制作途上で放棄された可能性が高いが、縄文時代草創期あたりの槍先形尖頭器または小型打製石斧の未製品の可能性がある（写真５）。石材は硬質緻密な流紋岩で、まだらに風化の進行しない褐色の部分を残している。山頂部北側斜面には、山頂部から掻落されたと推測される流紋岩片が山道切通断面に積層しているので、この打製石器も山頂から落ちてきた可能性がある。

山頂部北側斜面の転落流紋岩片のほとんどは、白化劣化して破断の経緯を読み取ることは難しいが、丁寧に観察すると打点が認められて流理に沿って剥離されたことがわかるものがある（写真４）。

山道崖に露頭した塊状の流紋岩を一つ採取して試割りを行ったところ、極めて硬質緻密でガラス質の貝殻状剥離が可能な良質個体であることが判明した。白化したものと比べてかなり比重が重く、色調も暗褐色を呈し光沢があって、適度な裂けやすさと粘りをもった石材である（写真６）。筆者としては、このような石材が、上記採集打製石器のような精密な剥片石器制作に供することができる石質であると思われた。周辺崖には似たような流紋岩塊の露頭が見えるので、ひょっとすると山体深部には劣化の少ない流紋岩脈が埋没しているかもしれない。

畝傍流紋岩の流理面は、頂上南西側斜面では東西の方向で南に80度高角に傾斜し、南東側では北40度でほぼ直立する。流理には褐色または黒色の線条があり、頂上付近では流理が粗くて板状構造となっている。この板状構造の露頭の一部には、東西方向に構造が劣化破壊され白色粘土化した部分があって、帯状に熱水変質して脆弱化していることから、畝傍山山体基底から山頂に向けて熱水供給が長期間続いた可能性が指摘されている（成迫2009）。畝傍流紋岩の広域の白化劣化、珪酸脱落軽量化、さらに粘土化は、露出による雨水や、この熱水と高温の供給がもたらした可能性が考えられる。

畝傍山の西側に南北180m の急斜面で山頂にまで達する馬蹄形の抉れ部分があって（図１C）、山体崩壊の痕跡とされる。成迫法之は、この素因が流紋岩の高角節理と熱水変質の進行にあるとし、地震が誘因となったと考察している。この崩壊は、西方向に崩壊による流紋岩礫を含む

**写真５　採集した打製石器**

堆積物を供給した（図１D）が、この堆積物の上に姶良 Tn 火山灰が検出され、堆積物の放射性炭素年代と合わせ、山体崩壊の時期を最終氷期の29644±199calBP から35324±180calBP としている。このことから、後期旧石器時代前半期、畝傍山の西方には、山体崩壊によって多量の流紋岩石材が崩れ落ちて露頭していたと推測でき、山体深部の流紋岩脈を巻き込んでいるなら、剥片石器制作が可能な流紋岩石材が露頭採取可能になっていた可能性もある。姶良 Tn 火山灰降灰後には、次第に土壌堆積で覆われ沖積層で埋没することから、畝傍山西方での石材取得の可能性は乏しくなるが、今後西方で遺跡探査が必要である。

畝傍流紋岩の旧石器時代石器は、奈良県下で知られていない。隣接する橿原縄文時代遺跡（末永1961）にも、畝傍流紋岩製打製石器の出土はなく敲石や砥石がわずかにあるに留

**写真６　硬質流紋岩の試割り**

**写真７　板状白化流紋岩**

まる。奈良県田原本町唐古遺跡など奈良盆地の弥生時代遺跡でも、白化した短冊状の畝傍流紋岩が石包丁や磨製石斧の石材となっている事例が知られ、弥生時代の磨製石器原石産地として認知されているが、打製石器はない。現在畝傍山で容易に採取される白化板状石材は、流紋岩の流理構造から平坦板状に剥離する性質があって（写真７）、加撃剥離の痕跡を観察しにくいが、石包丁や磨製石斧制作のため弥生時代の人為的な石材切出しや整形の所作が介している可能性がある。

## ２　橿原縄文時代遺跡

末永雅雄（1897-1991：奈良県立橿原考古学研究所初代所長、関西大学名誉教授）は、1938（昭和13）年夏から41（昭和16）年秋まで奈良県橿原遺跡を発掘し、爾後橿原遺跡に接して設立した橿原考古学研究所で整理研究を続け、1961（昭和36）年に発掘調査報告書「橿原」（末永1961）を刊行した。

末永雅雄が指導を受けた濱田耕作京都帝国大学教授の著書『通論考古学』（濱田1922）は、特定石材の石器が分布する範囲は、先史時代人の移動や交易を示すものとして注目し、考古学として地質学岩石学上の知識が必要であること

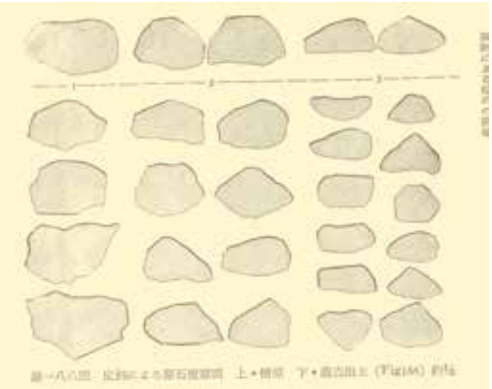

**図２　サヌカイト礫の復原（末永1961）**

を論じている（第１編第３章13「地質学」）。

末永雅雄も、濱田の国府遺跡以来の問題意識を継承（山口2022）し、報告書第六章第三「石器」で、「元来石質はその産出地との関係があり、産出地は交通によって需要供給の問題が生じる。このことは石器時代人としては彼等の生活にとって重大な意義をもっている。」「石器の各形式を見るにあたり、先ず原石に対する問題を考えなければならない。」として、梅田甲子郎奈良学芸大学助手に石材鑑定を依頼した。新鮮面観察や顕微観察が不可な石器類に対して「外観からの観察」での鑑定に限界があることを断ったうえで、岩石を「領家型花崗岩類」「三波川系結晶片岩」「秩父系の岩石」「中生層の岩石（？）」「主として瀬戸内火山系に属する火山岩」「鉄物類及び珪化木」「割らねば不明」の７類に分けた。打製石器のほとんどが「主として瀬戸内火山系に属する火山岩」から制作され、「打製石鏃」「石錐」「皮剥」は「サヌカイト」「讃岐石（二上山岳雄、二上村春日）」が原石となっていることが記載された。西接する畝傍山の流紋岩は、七類の石材のうち「主として瀬戸内火山系に属する火山岩」に含まれるが、敲石と砥石がわずかに判別されただけで、橿原縄文時代遺跡に流紋岩製打製石器生産はなかった。

末永雅雄は、二上山産出サヌカイトをめぐって、「この原石の産出地との距離的な問題は、直ちに橿原縄文人の交通範囲を物語る」が「石器の用途と岩質が直接の相関関係を有し」ていると指摘した。報告書第九章第三「皮剥による原石の復原」では、「石器の材料がその原産地からいかなる手続きをもって需給せられたか」は、二上山北麓から約13km 離れた橿原遺跡の縄文時代、「古代経済史上にもかなり重要な問題」であるとする。

橿原遺跡の縄文時代サヌカイト製打製石器のうち、粗製品に大きくて原石自然面を残存させるものがあって、皮剥（削器類）などの残存自然面カーブから推測される原石サイズは、直径10cm 前後、大きくても15-18cm 直径の二上山産出サヌカイト礫（推定約3.5kg 程度か）であることを解明した（図２）。興味深いのは、「サヌカイトの原石は一人の加担重量を、塊石の数によって調節せられて各地に運搬せられたとする見解」という、一種の「仕事力＝距離×重量」

物理学的原理を包含する点である。末永雅雄の橿原遺跡の石材をめぐる検討は、縄文時代橿原遺跡の需給者自身の二上山北麓への直接採取か、交易形態によるか、原石産地優位集団との交渉があったかまで論述され、「橿原遺跡で出土する原石産出地の問題は、サヌカイト以外になお各地に及んでいる」とし、報告書７類の石材すべてを視野に入れるべきことも指摘した。

畝傍山に隣接する橿原遺跡で、打製石器生産に畝傍流紋岩が供されないのは、該当期の畝傍山で相応の流紋岩の存在認知や採集が困難であったか､石材選択がサヌカイトを嗜好していて、意図的に流紋岩を排除したかの可能性が考えられる。近傍にどのような石材があるか認知することは、石器時代人の先史経済学的自然資源把握に必須であるので、知らなかったとは考えにくい。石器時代人の石器製作技術の慣性と一体となった継続的サヌカイト「専択」の結果が、ほぼ畝傍流紋岩の「無視」につながったのではなかろうか。一方、今回採取した畝傍流紋岩製打製石器は、所属時期や石器文化など詳細は不明であるが、旧石器終末縄文草創期など流動性のあった時期に、短期的に開発が行われた可能性を考慮して、畝傍山の踏査を継続し内容の掌握に努めたい。

## 3　いくつかの課題

打製石器は、さまざまな岩石を材料にして作られている。岩石は、日本列島の地質構造を反映したものであり、あまりに普遍的な存在ではあるが、火成岩・堆積岩・変成岩、それぞれ産出地の地質構造や産状の違いによって多様性があって、そのなかで打製石器、特に剥片石器になったのは、適度な裂けやすさと粘りをもった石材であり、緻密な珪酸質岩石のガラス（玻璃）質に優れたものが選択されている。

支配的石材である「サヌカイト」は、濱田耕作京都帝国大学教授（1881～1938）が第京都三高等学校在学時に河内国府遺跡を踏査、採集した漆黒の石器が堆積岩の粘板岩ではなく、火山岩の「安山岩」または当時地質学岩石学で注目されていた「讃岐石 Sanukite」であるとの松島鉦四郎第三高等学校教授の教示を受け、同種石材が火成岩として二上山北麓に産出することを指摘し、これが国府遺跡で石器石材となっていることを報告した（濱田1900）ことから定着した考古学的岩石名称である。濱田教授は、河内国府遺跡の発掘調査報告書で再論し、「サヌカイト：Sanukite」は、「讃岐石」であって、岩石標本産出地名から命名された地域概念を含む名称であるので、近畿地方のように二上山産と推定できる場合には「玻璃（ガラス）質安山岩」という一般名称と二上山産を示す産出地名「二子石（フタゴナイト）」を、考古学的には二命名法的に記述することを提案（濱田1918）したが、学術名称として定着しなかったという経緯もある（山口2022）。

今では、近畿地方中央部で石器石材を記述する際、岩石鑑定を省略して肉眼観察により「サヌカイト製」と記載すれば、「二上山産」であると認知され、それ以上の吟味が省略されるようになっていて、同質石材産出地探索を回避する潜在意識を生むという研究上一種の死角になっている危惧を感じる。しばしば行われる蛍光X線分析による石材産地分析は、考古学側が選別した石器検体のみが提供され、全量分析ではなく風化面除去作業のできる選別資料に留まっていて、周辺石材環境との突き合わせる比較分析標本の提供がない場合がほとんどであって、実は大きなバイアスが潜んでいる可能性がある。

近畿地方石器時代遺跡の打製石器は、特に火山岩であれば、可能性のある火山岩産出地の石材と対比を行って、遺跡と産出地帯の対応を観察することが必須である。筆者は、サヌカイトや畝傍流紋岩などを含め、火山岩産出地の踏査を続け、遺跡と石材原産地との対応を検討し、石材と石器時代の関係を動的に考察する必要があると考える。

**引用参考文献**

末永雅雄1961『橿原』
成迫法之2009「畝傍山の山体崩壊とその年代」『全地連技術 e- フォーラム2009松江』
春木篤夫1932「南大和の小火山」『地球』第18巻第３号
濱田耕作1900「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」『東京人類学会雑誌』第174号
濱田耕作1918『京都帝国大学文学部考古学研究報告第２冊　河内国府石器時代遺跡発掘報告』
濱田耕作1922『通論考古学』
山口卓也2022「濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」」『関西大学博物館紀要』第28号

関西大学博物館・学芸員

# 100年歌い継がれた
# 関西大学学歌のゆらぎについて

篠　塚　義　弘

## 1　はじめに

2022年は、関西大学にとって大学昇格100年、千里山キャンパス開設100年を迎える年である。

そしてもう一つ、100年を迎えるものがある。それは、学歌『自然の秀麗』である。

大学昇格時の中心人物であった山岡順太郎総理事は、大学昇格を期に従来の校歌から新しい時代にふさわしい学歌を求めた。そこで、服部嘉香文学部教授に作詞を、山田耕筰に作曲を依頼して、学歌が1922年９月に誕生したのである。

筆者は、５年前から博物館事務室に席を置き、ゼンマイ駆動の蓄音機とSPレコードなどのメディアを担当してきた。そして、４月の関西大学校友会主催のスプリング・フェスティバルなどで蓄音機を用いて1931（昭和６）年制作の関西大学学歌のSPレコードを披露・演奏してきた。その中で、1924（大正13）年制作の山田耕筰自らが吹き込んだ学歌音源や現在の学歌音源など複数の時代の音源に微妙に違い（ゆらぎ）があることに気付いた。今回、年史編纂室に保管されている過去の学歌ソノシートやレコードを調査する機会を得たので、10種類の学歌音源と付属の歌詞カードについてのゆらぎを一覧表にした（表１）。学歌に時代によるゆらぎがあることは、石田健一が「学園歌の沿革と現状をみる－その正しい継承と高揚を願って－」『関西大学年史紀要』第18号（2009（平成21）年３月）で指摘している。石田の指摘をベースに、音源に関して１）歌詞、２）速度（テンポ）、３）音程の３項目について述べる。

## 2　学歌の変遷

### ２－１　歌詞について

10種類の音源と付属の歌詞カードを比較して、過去に３度の変化があったことが分かった。学歌の歌詞は、完成するまでに何度も推敲を重ねている。主な経緯を述べる。山岡総理事ら大学首脳陣は、歌詞を依頼した服部嘉香に「真理の討究」と「人格の陶冶」を二本立てとし、「学問の実際化」「自由の訓練」「自治の発揮」の文言も盛り込みたいと要望していた。服部嘉香は歌詞の原案を作り、これを『千里山学報』第２

**表１　学歌『自然の秀麗』のゆらぎ**

| No. | 製作年 | 媒　体 | | 歌　唱 | 歌　詞 | | | 速度（テンポ） | | 音　程 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 録音媒体 | 媒体番号等 | | 理想 | 実化 | ３番１節 | 演奏時間 | ♩＝換算 | |
| ① | 1924（大正13）年 | SPレコード | ニットー | 山田耕筰 | 理想 | じつげ | 自由の尊重<br>自治の訓練 | 60秒 | 116 | 正 |
| ② | 1931（昭和６）年 | SPレコード<br>26510 | コロムビア<br>41325 | 関西大学合唱団 | 理想 | じつげ | － | 60秒 | 116 | 正 |
| ③ | 1961（昭和36）年 | ソノシート | 太安堂印刷 | 関西大学 | 理想 | **じっか** | 音源）自由の尊重<br>自治の訓練<br>歌詞）**自由の訓練**<br>**自治の発揮** | 64秒 | 109 | **高** |
| ④ | 1965（昭和40）年 | ソノシート | ビクター<br>WFS-8019 | 大阪放送合唱団 | 理想 | **じっか** | **自由の訓練**<br>**自治の発揮** | 56秒 | 124 | **高** |
| ⑤ | 1969（昭和44）年 | LPレコード<br>44-33 | テイチク<br>OM-789W | 関西大学文化会<br>グリークラブ | 理想 | **じっか** | **自由の訓練**<br>**自治の発揮** | 60秒 | 116 | **高** |
| ⑥ | － | LPレコード<br>47-32 | テイチク<br>OS-1325W | 関西大学文化会<br>グリークラブ | 理想 | じつげ | 自由の尊重<br>自治の訓練 | 61秒 | 114 | **高** |
| ⑦ | 1976（昭和51）年 | カセットテープ | － | 山本禎二<br>岩城拓也　他 | **理想を** | じつげ | 自由の尊重<br>自治の訓練 | 64秒 | 109 | **高** |
| ⑧ | 2006（平成18）年 | CD<br>「關大」縮刷版 | － | － | 理想 | じつげ | 自由の尊重<br>自治の訓練 | 77秒 | 90 | **高** |
| ⑨ | 2008（平成20）年 | CD | － | － | 理想 | じつげ | 自由の尊重<br>自治の訓練 | 62秒 | 112 | **高** |
| ⑩ | 2016（平成28）年 | Web | － | － | 理想 | じつげ | 自由の尊重<br>自治の訓練 | 62秒 | 112 | **高** |

号（1922（大正11）年７月）に掲載して広く意見を求めた。その上で、山岡順太郎総理事、宮島綱男専務理事と服部嘉香の３人で歌詞の推敲を重ね、山田耕筰に作曲を依頼した。山田耕筰は、３番の歌詞を「自学の修練　自治の発揮」から「自由の尊重　自治の訓練」に読み替え、「実化」を「じつげ」と歌うように求めて、現在の学歌が確定した。山田耕筰の歌唱指導については、ここでは割愛するが、『千里山学報』第８号（1923（大正12）年４月）に掲載されている。

１）「燦（さん）たる理想（を）」

これは歌詞と楽譜の音符との対応に起因するゆらぎである。⑦の楽譜と歌詞カードのみ「燦（さん）たる理想**を**」と表記されていた。現在は、音声として長音「ー」とするか「う」または「(お)」を音符に当てるようになっている。他に『七十年史』でも「燦（さん）たる理想**を**」と表記されている。

２）「学の実化」の読み

作曲家の山田耕筰の意向で、「実化」を「じつげ」と歌うが、日常的には普通名詞として「じっか」と発音する。山岡総理事の女婿にあたる岸田幸雄から「義父はジッカと言っていました」との聞き書きも残っている。実際の音源では、③、④、⑤が「じっか」と歌っている。

３）　３番の歌詞

山岡総理事は学歌の揮毫を残している。揮毫３番の歌詞は、山田耕筰が変更する前の服部嘉香オリジナルの「自学の修練　自治の発揮」でなく、「自由の訓練　自治の発揮」である。③、④、⑤の歌詞カードは山岡総理事の揮毫と同じであった。ただし、③の音源は山田耕筰の指導通り「自由の尊重 自治の訓練」で歌っている。

２－２　速度（テンポ）について

作曲者の山田耕筰は、自筆の楽譜の冒頭に「Tempo di Marcia（マーチのような速さで）moito energico ben marcato（非常に力強く明瞭に）」と記している。これは、学歌を応援歌や行進曲としても使えるようにとの思いがあったからである。「マーチのような速さ」とは非常に曖昧な表現である。学歌の楽譜は29小節、４分音符換算116個で構成されているので、60秒間で１番を歌えば、速度表現は♩＝116となる。そこで10種類の音源を実測し、その歌唱の演奏時間と四分音符換算の数値を一覧表に示した。数値が少ない方がゆっくりしたテンポである。昭和の後半の1976（昭和51）年から2006（平成18）年にかけて、特に創立120周年直前には、⑧のようにゆっくりしたテンポであったが、創立120周年以降の2008年では⑨のようにほぼ元に戻ったことが分かった。

２－３　音程について

現在１ヶ所、山田耕筰の楽譜とは異なる音程が温存されている。１番の歌詞では「若き心にたたーえなん」の「え」の四分音符の音階が直前の長音「ー」と同じ音階に一音高くなっている。石田の「学園歌の沿革と現状をみる（続編）」（『関西大学年史紀要』第19号、2010（平成22）年３月）によると、山田耕筰の原曲は長音「ー」より一音下げることで微妙な抑揚を与えているが、同じ音階で歌うことにより単調になっている。そして、この誤りは、1952（昭和27）年の『関西大学学報』付録が発端のようである。なお、現行の方が歌い易い音程であるため、現在でも慣用されていると推測される。

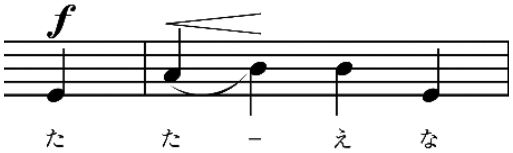


**図１　音程の誤り「え」**

## ３　おわりに

関西大学では、学歌を含めた正しい学園歌の普及を願って、教育後援会の協力を得て、記録媒体を作製して新入生などに配布してきた。記録媒体は、ソノシート、LP レコード、カセットテープ、CD と時代とともに変化してきたが、普及に対する関係者の熱意には感謝と敬意を表したい。100年間歌い継がれてきた歴史ある学歌は、途中で何度かの変遷はあったものの、ほぼ原型のまま伝わっていることに改めて気付かされた。今回の比較には含めなかったが、関西大学内では凜風館カリヨンの毎日午前９時の時報や学内電話交換機の保留音など、身近なところで学歌メロディが使われている。私達は、知らず知らずの内に『自然の秀麗』を体感しているのである。

関西大学博物館・学芸員

# ◘ 博物館だより

◇2021年度イケフェスに参加（関大村野建築の動画を掲載）

10月30日から31日にかけて「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」に関西大学千里山キャンパスも参加しました。その一環で、関西大学博物館が入っている「簡文館」の建物を紹介する動画を公開し、Facebookにてパート１、２あわせて176名に見ていただきました。

Facebookでは、昨年の５月から月１回ほどのペースで、「博物館の展示物について」や「学芸員の業務」、「文化財について」といった内容を埴輪たちが紹介する漫画をアップロードし公開しております。

◇「博物館実習展」及び関西大学博物館収蔵品展「漆芸の美」の開催

昨年に続くコロナ禍の中、11月８日から13日まで開催しました。展示室内の密を回避するため、実習生による解説は取りやめ、代わりにQRコードを読み取ることによって実習生が作成した解説動画にアクセスできるようにしました。今年度は42名の実習生が「きつね～人と狐の不思議な歴史～」、「天保山　浪花の新名所」、「戦時下の日常～戦争遺品が語る人々の暮らし～」、「音楽ナウ－思い出再生中－」、「発見！こんなところに和楽器～埴輪から漫画まで～」の５班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。また、2021年度特別展示として、関西大学博物館収蔵品展「漆芸の美」を同時開催し、会期中には409名の方にご覧いただきました。

◇2021年度冬季企画展「池田家藩主三代の手蹟」

標記企画展を、2021年12月10日から2022年１月19日にかけて開催しました。本展は、関西大学と岡山県岡山市にある林原美術館との連携協定に基づく取り組みの一環として開催され、同美術館が所蔵する岡山藩主池田家旧蔵品の中から、選りすぐりの15点を展示・公開しました。コロナ禍の中、444人の方にご来場いただきました。

◇昨年度から調査を行っていましたSPレコード「松本コレクション」について、11月20日になにわ大阪研究センターセミナー室で研究成果報告会を行い、23名の参加を得ました。この中で、本学の女子学生第１号である北村兼子氏の講演記録やベルリンオリンピックの実況録音なども披露しました。

## ・・・編集後記・・・

表紙の「ビクターIV型TypeM」は、教育後援会有志の方から寄贈された蓄音機です。博物館では、コロナ感染状況を見ながら11～12月に蓄音機によるSPレコード演奏会を昼休みに５回開催し、延べ95人の参加者を得ました。

博物館の前身である考古学等資料室の運営に初期から携わり、故網干善教先生とともに全国大学博物館学講座協議会及び同西日本部会の立ち上げや当館の開設に尽力した角田芳昭氏が2021年12月22日に享年85歳で永眠されました。心からご冥福をお祈りいたします。

関西大学博物館彙報　No. 84　2022年３月31日　発行
関西大学博物館　　編集